

技術、人材、観光の相互開発の視点から地域行政への提言

— インドが燃えている —

城東支会
後藤 武史

2003年、米国証券会社ゴールドマンサックスが、BRICsという造語を発表、「2050年世界の展望」という論文の中で「将来ブラジル、ロシア、インド、中国のGDPが世界のGDPの半分を占める」、「将来、GDPは中国、インド、アメリカ、日本の順になる」「インドは中国を抜いて世界一の人口大国になる」というような発表があり、現実には、インドのバンガロールは既に米国シリコンバレーの上を行くITの世界センターになりつつあるといわれている。

更に加えて、サマセット・モームが「この世に現存する国で天国に一番近い国がインドだ」と書いてあったことを想起して東京支部国際部のインドミッションの一員として、10月10日～16日の一週間インドの実態を身近に体感してきた。

JETROバンガロール事務所長久保木一政氏は「技術者の囲い込みに必死な日系企業」、「求む、日本語の出来るインド人技術者—日印の人材派遣会社が提携」、「8月の自動車販売は、18%アップ」と強調していた。バンガロールの実態を見て、躍進

するインドの明るい未来を予感した。バンガロールには世界一のIT産業Fidelityやトヨタグループ等最先端企業が結集している。

Fidelityは戦略本部をインドのバンガロールにおいていた。日本の中小企業はこういう地域に人材、部品、投資を行いその抜群の伸び率とコラボレートしたほうがいい、既に、バンガロールのPAISLEY EXPORT (LTD) は100%日本向けにコットン(木綿)製品を製造し製品輸出しているが、値段が安いので、製品が間に合わない。理由は人件費が月給12,000円というローコスト経営である。主製品はコート、スーツ、シャツ等主として女性もの。100%コットンだが、低価格ということで大手スーパーにも直販している。

販売先の固定客は日本橋の卸がメイン。バンガロールには、大手は世界一のIT企業Fidelity, Fidel Softech, AdarshCollege, 大手TATA ELXSL (TATAグループ), UNISOFT, AVESTHAGEN, TED MAG, Adamy COMPUTING TECHNOLOGIES, 日本進出企業DENSOはいつでもビジネス大歓迎という感じなので、バンガロールのPAISLEY EXPORTS (LTD) が日本橋に商品が間に合わないくらい売り込んでいるようにこちらからも売り込みに行くべきである。

そのための仲介機関としては、日本貿易振興機構(JETRO)バンガロール事務所、Bangalore Chamber of Commerce and Industry (バンガロール商工会議所)、Prime-Tech Services Pvt. Ltd.のディレクターであり、インド日本商工会議所・名誉幹事、インド日本商工会議所カルナカタ



トヨタバンガロール



インドの宝石、タジマハール

州名誉幹事のP.N.カラントツ氏等が力を貸してくれそうである。アメリカのシリコンバレーの上を行き世界のITの中心になりつつあるインドのバンガロールのこれらの人々と交流をし、日本の更なるレベルアップに繋がたい。そのためには日本橋等既にインドとの豊富な交流体験のある地域行政が手腕を振るってインドからの人材、技術、木材、宝石、日本から、シルク（今インドはサリーの原材料シルクは100%中国から輸入している）、化粧等の取引をきっかけに、更なる、人材情報の交流を図りたいものである。

特にバンガロール現地の企業ニーズとしては、インド総貿易額に占める日本の総貿易額が5%と非常に少ない中で、日本の高度な技術、資本、人材、ITのインドへの進出を真剣に願っている。したがって現地を熟知した中小企業診断士が仲介し、行政が率先して誘導し、現地への企業進出、企業誘致を進めては如何か。北朝鮮を巡って、態度の不鮮明な中国と、第2次大戦の東京裁判で、日本人戦犯の擁護発言をしたインドと、これから先どちらに投資を増やすか、じっくり頭を冷やして考えるべきである。しかも人件費はインドは1~2万円、中国は沿海部では、既に4~5万円になった。親日感、労働コスト、両面からインドへの投資に切り替える時期が来ている。広大な面積、豊かな人口（労働力）、英語が話せる、政治が安定している点では強みである。日本の中小企業のポテンシャルとしては、日本企業、日本工業の原点である織物、特にシルクは100%中国から輸入しているので無限の可能性はある。先ず行政が戦略を練って進出企業を選定し、順次送り出していくべきである。

今、中国はインドのサリーの原材料にシルクを100%供給しているが、日本が進出となると、中国が、どのような手に出てくるかわからない。したがって、この作戦は、我が国の官、学、民、企が総力を結集してかからないと勝てない。民と書いたのは、養蚕業の農家も一角を担うからである。したがって、行政は、経産省、文部科学省、農水省、外務省が、連携を密にし、技術力、製品力のある中小企業のインド進出に対する支援策を期待したい。

日本に一番近いヨーロッパであるロシアの資源は未知数である

—しかし、人(人材)、情報、もの(商品)、金(投資)、を日本に求めている—

城東支会
後藤 武史



2003年、米国証券会社ゴールドマンサックスが、「2050年世界の展望」という論文を発表し「将来BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）のGDPが世界のGDPの半分を占める」という造語をきっかけに、ロシアが元気になっている。もともと天然資源埋蔵量は未知数であったところへサハリンに莫大な天然ガスが発見され、急激な利権競争と開発争いが起こっている。我々中小企業診断協会東京支部国際部は、今一番元気が良く、将来性もあるウラジオストク、ハバロフスクの極東ロシア視察ミッションを平成17年9月11日～16日決行した。

ロシアの面積は 日本の60倍、人口はほぼ日本並みの1億4350万人、ロシア人が総人口の81.5%と圧倒的多数を占め、残りを多くの少数民族が占める他民族国家。ロシア人に次ぐのはタタール人で3.8%、次いでウクライナ人2.9%、チュバシ人1.2%等。100以上の言語があるが、ロシア語が公用語。ロシア正教が最も優勢であるが、他民族国

家を反映してイスラム教、仏教、ユダヤ教等多数の宗教が混在。

ロシア国家の起源は、9世紀にノルマン人の首長リュウイックが、ノブゴロドに来て、「ルーシの国」を建てたことにはじまる。13世紀にはモンゴルの支配を受けたが、やがてモスクワ大公国が台頭し、15世紀のイワン雷帝のときにモンゴル支配を克服。らい帝の死後、動乱時代を経てロマノフ朝成立。ピョートル大帝（1682年即位）の時代にロシア帝国の基礎が築かれる。この帝国は、1917年2月の革命により崩壊し、代わって同年10月の革命でレーニン率いるボリシェビキソビエト連邦（ソ連）が成立。

このソ連は、共産党の一党支配を基盤とする社会主義国家として1960～80年代には米国と覇を競うまでになったが、経済・社会は停滞。



このような状況を打破するべく、1980年代後半に登場したゴルバチョフ書記長の指導の下に「ペレストロイカ(建て直し)」政策が進められたが、



国内の混乱を招き、共産党支配が揺らぎ始めた。そして、1991年8月の政変を契機として一気に崩壊が始まり、同年12月に解体。このソ連を引き継いだのは、エリツィン大統領が率いるロシア連邦で、同大統領は民主化と市場経済化のための大胆な改革に着手したが、多くの困難を伴い、結局1999年末に任期終了を待たずに辞任した。その後2000年3月の大統領選挙でプーチン氏が勝利し、同年5月二代大統領に就任した。同大統領は、市場経済化の路線とともに、混乱した政治状況を収束させるべく縦の権力体制の構築を進め、政治的安定を達成。又ロシア経済の好調と個人的人気もあり、2004年3月14日の大統領選挙で70%上の圧倒的得票率で再選され、同年5月に2期目の任期に入った。

プーチン大統領が先ず始めたのは、減税と、社会構造をゆがめている警察より強力なマフィアの撲滅であった。この2つの政策は直ちに成果を現し、企業が元気を取り戻し、まっとうな商売がのびのびとやっているという感じだった。私の4年前の極東ロシア訪問時とは元気という面で、大違っていた。

聞くとところによると、4年前のプーチン大統領の大改革による好況と、高成長の波が4年かかってこのシベリアの一部である極東の最果ての地に

も好況と高成長の恩恵をもたらしたとの事である。

我々ミッション一行は、9月12日(月)、外務省ウラジオストク日本センターを訪問し浅井所長から、極東ロシア情勢について、大局的に公演を拝聴し、質問や、意見交換を行った。

次いで、シベリヤ鉄道夜行列車「オケアン」号で、ウラジオストク駅から720km北上し、ハバロフスクへ向かった。夜汽車は、漆黒のシベリア平原を、まっすぐ北へ向かって走った。9月14日(木)、今度は、外務省ハバロフスク日本センターで、前田所長の講演を拝聴し、質疑、意見交換を行った。その後も、両所長とはメール等で連絡し合い、今年になって平成18年1月12日(木)ウラジオストク日本センター浅井所長の正月帰郷を捕らえロシアミッションメンバー中高島利尚団長を初めロシア熱烈愛好家が集まり、浅井所長の歓迎会兼懇話会が開催された。次いで、在外日本センター所長会議の機会を捉え、1月25日18:30から診断協会地下談話室でハバロフスク日本センター前田所長の歓迎会兼懇話会が行われ。

4回の会合では、これからの極東ロシアでのビジネスの内容と、時期についてだった。内容は、青森の大型りんご等果物の輸出、家具等木製品、材木資材の輸入、等現在行っている取引の拡大と新商品の開発、ウラジオストク、ハバロフスクで現在行われている現地のロシア人経営者に対するセミナー講師としての招聘を受けた。

ここで、地域行政担当者をお願いであるが、このように、予算も権限も最高の地位にある極東ロシアの日本センター所長が新商品や、情報、人材を求めているので、どうか我々とコラボレーションし、協働して頂きたい。

出来れば、我々中小企業診断士が、ウラジオストクと日本、ハバロフスクと日本の橋渡しが出来るといったような機会を創っていただきたいと切望するものである。